

山梨県西八代郡上九一色村

# 遺跡詳細分布調査報告書

1998

上九一色村教育委員会

山梨県西八代郡上九一色村

# 遺跡詳細分布調査報告書

1998

上九一色村教育委員会

## 序 文

本栖湖の湖底から古代の高坏や甕が発見され、「湖底に眠る土器の解明と水中遺跡の保護」を目的に、平成10年度「上九一色村内遺跡分布調査事業」の一環として水中遺跡分布調査及び、村内遺跡の再調査を実施いたしました。調査にあたって上九一色村遺跡調査会を結成、県内の考古学研究者の方々に御指導、御協力をいただきとともに、専門技術が必要とされる現地の水中分布調査は「日本水中遺跡保全協会」に委託し、平成10年9月から平成11年2月にかけて実施いたしました。その結果、湖底より縄文時代（4,500年前）の土器や古墳時代（1,600年前）の土器が発見され、かつてこの一帯に古代のムラが存在していたことが推定されました。

この調査が、水中遺跡の保護と文化財による地域開発等の資料として活用いただければ幸いです。

末筆ながら調査に御指導、御協力いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

上九一色村教育委員会

教育長 小澤文雄

## 例　　言

1. 本報告書は、山梨県西八代郡上九一色村の遺跡・埋蔵文化財の詳細分布調査報告書である。
2. 分布調査は、平成10（1998）年度文化財保護事業として、文化庁・山梨県の補助金を受けて、上九一色村教育委員会が実施した。
3. 分布調査及び遺物・記録の整理作業、写真撮影は以下の者が行った。

田代 孝・八巻雅範・桜井數馬
4. 水中調査は、日本水中遺跡保全協会が行った。（潜水調査・総指揮＝高頭健夫、撮影記録・指揮＝佐藤進一、水中写真撮影＝西山卓樹、水中映像撮影＝森 繁和、水中調査＝難波高士、中山 崇、法政大学探検部）
5. 本報告書の執筆・編集は田代が行った。
6. 分布調査の記録・遺物は上九一色村教育委員会が保管している。
7. 調査から本報告書作成に至るまで、次の諸氏、諸機関からご指導、ご協力を賜った。謝意を表する次第である。

山梨県埋蔵文化財センター、帝京大学山梨文化財研究所、本栖湖漁業組合、本栖湖観光協会、中山誠二、石神孝了

# 目 次

序 文

例 言

目 次

挿図目次

表 目 次

図版目次

第1章 調査に至る経緯 ..... 1

第2章 地理的歴史的環境 ..... 1

第3章 調査の方法 ..... 2

第4章 遺跡の調査と概要 ..... 3

  1 村内遺跡の調査 ..... 3

  2 村内の遺跡 ..... 5

  3 村内遺跡の概要 ..... 7

第5章 本栖湖の湖底遺跡の調査 ..... 9

  1 調査の経緯 ..... 9

  2 湖底の遺物 ..... 9

  3 湖底遺跡の調査成果 ..... 10

## 挿 図 目 次

第1図 上九一色村遺跡分布図	4
第2図 村内遺跡関係土器実測図及び中世城館跡図	8
第3図 湖底遺跡遺物分布図	11
第4図 湖底遺跡土器実測図	12
第5図 湖底遺跡土器実測図	13
第6図 湖底遺跡土器拓影・石器実測図	14

## 表 目 次

第1表 村内遺跡一覧表	3
-------------	---

## 図 版 目 次

図版1 湖底遺跡調査風景
図版2 湖底遺物確認状況(1)
図版3 湖底遺物確認状況(2)
図版4 湖底遺物確認状況(3)
図版5 湖底遺物(1)
図版6 湖底遺物(2)

## 第1章 調査に至る経緯

上九一色村内の遺跡は、昭和48年（1973）度の「山梨県埋蔵文化財包蔵地分布調査」によって、古闕日向山の「菖蒲の池遺跡」が報告されている。昭和54年（1979）度の『山梨県遺跡地名表』（山梨県教育委員会）、昭和56年（1981）度の『全国遺跡地図山梨県』（文化庁）に掲載されている。

昭和58年（1983）に村誌編さん事業に伴う遺跡分布調査によって、村内の遺跡は21カ所となった。さらに、中世城館跡なども「上九一色村誌」（1985）では取り上げていることから遺跡もやや増加し24カ所となっている。

遺跡は、先人たちの生活の痕跡をとどめている場所である。現在に生きる人間にとって、よりよい社会を形成するためには遺跡から学ぶことは多い。地域開発と埋蔵文化財の保護・活用の上で調和のとれた関係をつくりだすために、従来の遺跡分布調査の成果をふまえつつ、新たに村内遺跡詳細分布調査を実施することになった。特に数年来、本栖湖の湖底発見の上器が話題となっていたが、本調査において遺跡の把握につとめることになった。

調査は平成10年（1998）9月～平成11年2月にかけて、上九一色村遺跡調査会を結成し、県内の考古学研究者および日本水中遺跡保全協会によって実施された。

## 第2章 地理的歴史的環境

本村は山梨県の南部に位置し、甲府盆地南部の芦川沿いの渓谷に展開する集落（北部）と、女坂を越えて富士北麓西部の精進湖、本栖湖、青木ヶ原樹海や広大な原野を有する集落（南部）からなり、東西約9.2km、南北約16.9kmと南北に長い村域である。面積は約86.5km<sup>2</sup>であり、耕地は少なく、総面積に占める割合は7%にすぎない。

古代は甲斐国八代郡に属したが所属した郷は明らかでない。「三代実録」によれば、貞観6年（864）5月の富士山大噴火によって本村域の多くの民家が埋もれ、剣の海と本栖の海も溶岩が流入し、剣の海が分断されて精進湖と西湖が誕生したという。青木ヶ原樹海もこの時の溶岩流上に形成されたものである。

甲斐への文化の流入は、東海から富士西麓を経由するのが1つのルートであり、海をもたない甲斐が駿河と最短距離で結ばれるルートであった。これが中道往還である。このルートは古くは弥生文化や古墳文化をも運んだのである。富士ヶ根「南二条遺跡」の弥生土器や精進「居村遺跡」、本栖「湖水遺跡」の古墳時代の土師器の発見は、そのことを語っているといえよう。中道往還は戦国期における武田氏の軍用道路となり、物資輸送路ともなったが、通過する迦葉坂と川駿国境の間に散在する9か村が九一色郷であった。本村域は梯・古閑・精進・本栖の4か村である。ここに居住する在地武士団として九一色衆があり、武田氏は南方警固をつとめさせている。天正10年（1582）武田氏滅亡後、天正壬午の戦いに功績のあった九一色衆に家康は諸商免役免許の印判状を与えている。九一色衆の一人、本栖の渡辺因獄は徳川家康に仕え、本柄の城山に居城し、九一色郷の守衛をつかさどったという。

江戸時代の本村域をなす4か村は、慶長検地によると古闕村94石余を最高とし、最低は1石余、合計132石8斗5升であった。200年後の文化年間、367戸、1,579人、142石2斗6合であり、その増加は10石ほどである。農業生産に依存しないことから、幕府から交付された諸商免役免許の鑑札をもって、商品の売買や駄賀稼ぎを営んだ、はじめは郷中で生産された木工製品を駄馬で各地に販売することであったが、江戸中期以降は、宮上山根方の木材、駿州の魚、塙などから甲州の煙草・市川紙・郡内絹などの売買を行った。

明治7年（1887）上九一色村が成立し、同11年西八代郡に所属。同22年上・下に分村し、梯・古閑・精進・本柄をもって上九一色村となった。明治以降、養蚕振興策のもとで、桑園と養蚕業の拡大が顕著になる。林産物は建築用材を出し、副産物としては薪炭・栗実・葛などがあった。積雪期に、本柄では犬糞棒・鍬柄・金剛枝・杵、

精進では箸・糸柄の類を製造した。

明治28年（1895）英人S・ソロモン（星野芳春）が精進ホテルを創業し、精進開発の先駆者となる。本村城と甲府を結ぶ右左口峠経由の難路に、明治43年（1910）右左口新道が開削され、大正5年（1916）富士登山者・精進湖遊客と一般運輸のため青木ヶ原新道が開通した。大正13年（1924）吉田精進線が県道に編入され、北麓開発道路の改修が進められたが、精進・本栖方面の開発の歩みは遅かった。

富士ヶ嶺高原は、戦後引揚者などの入植により開かれた県下最大の開拓地であり、酪農地帯として成災をあげてきた。戦前まで全村にわたり盛んであった林業は、本栖の椎茸栽培に限られ、梯・古樹では養蚕が中心になつた。昭和41年（1966）台風26号の災害後、女坂周辺の住民は精進湖南岸に移り、精進湖上宿村の営業を始めた。精進・本栖湖畔の観光施設の建設が進み、さらに、国道139号や昭和48年（1973）開通の甲府精進湖有料道路などの道路開発はめざましく、観光村として脚光をあびるようになった。

人口は大正9年（1920）1,997人、昭和15年（1940）1,804人、昭和35年（1960）2,309人で、その後、漸次過疎化の現象を示すなかで、本村の地域的な産業形態に応じた農業・酪農と観光村をめざしている。

### 第3章 調査の方法

今回の遺跡分布調査は、上九一色村教育委員会が教育委員・文化財審議委員・地元関係団体（本栖湖観光協会・本栖湖漁業組合）及び県内考古学研究者による上九一色村遺跡調査会（会長野沢等）を設置し、調査の計画、調査方法等を検討し実施した。調査にあたっては、村内全域においてすでに確認されている遺跡については、再確認の作業を重視し、調査の主体を本栖湖の湖底遺跡においていた。水中調査については専門技術を必要とすることから日本水中遺跡保全協会に委託して実施した。

現地調査終了後、採集遺物等の整理、分析等を実施し、本報告書の編集作業に入った。

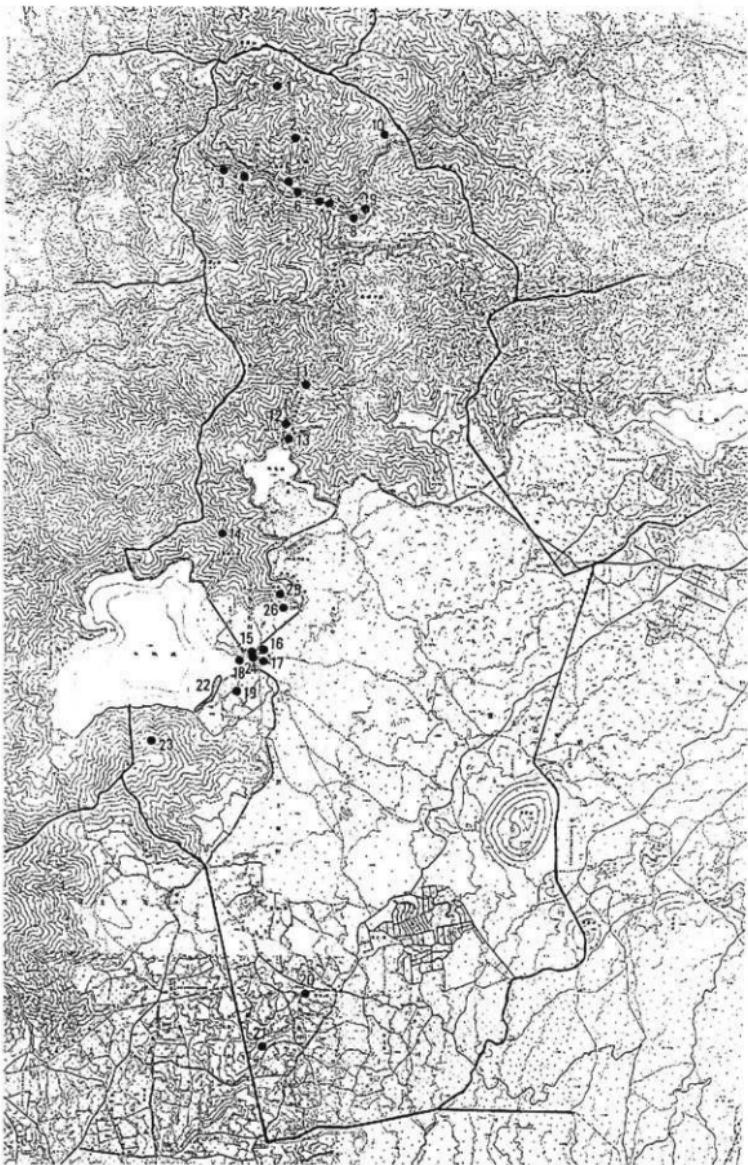
## 第4章 遺跡の調査と概要

### 1. 村内遺跡の調査

昭和60年（1985）の『上九一色村誌』に掲載された村内の遺跡数は24カ所であったが、今回の分布調査によつてその数は27カ所となる。以下に一覧表と分布図を示す。

第1表 村内遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	出土遺物
1	桶尻沢遺跡	奈良	土師器・須恵器
2	菖蒲ヶ池遺跡	縄文・奈良	土器片・土師器片・水晶片
3	大沢遺跡	縄文・平安	石礫・黒曜石・土師器片等
4	井ノ向遺跡	縄文	石礫
5	飯田遺跡	平安・中近世	土師器片・陶器片等
6	上平遺跡	縄文・平安・中近世	土器片・土師器片・陶器片
7	向原遺跡	縄文・平安・中近世	石礫・土師器片・陶器片等
8	東原遺跡	中近世	土師質土器片
9	入野遺跡	縄文・平安	土器片・土師器片等
10	荷付塙遺跡	縄文	黒曜石
11	精進遺跡	縄文	
12	居村遺跡	古墳	土師器
13	川崎遺跡		
14	大久保遺跡	縄文	
15	下畠遺跡	古墳・中近世	須恵器片・土師質土器片・陶器片等
16	中山遺跡	中近世	土師質土器片
17	高塚遺跡	中近世	土師質土器片
18	湖水遺跡	古墳	土器片
19	上野原遺跡	平安	土師器片
20	西一条遺跡	古墳	土師器
21	南二条遺跡	弥生	弥生土器
22	湖底遺跡	縄文・古墳	縄文土器・土師器片
23	龍ヶ岳経塚	近世	経石
24	渡辺氏屋敷	中世	
25	本栖の城山	中世	
26	樹海内石墨遺構	中近世	
27	土橋氏屋敷	中世	



第1図 上九一色村遺跡分布図

## 2. 村内の遺跡

### 1 楠尻沢遺跡（第2図）

日向山西側の楠尻沢に沿った標高約870mの南斜面に位置する。本遺跡は南向きで口当たりは良いが、40度近い急斜面となっている。1973年、山道を開設中に土師器の杯形土器・壺形土器・須恵器の鉢形土器・大甕の破片などが発見された。これらは8世紀代のものと考えられる。土器に伴って炭化材も出土しているが、立地から宗教的な場であった可能性が強い。

### 2 菖蒲ヶ池遺跡

飯田沢上流の標高880mの菖蒲ヶ池に所在する。小尾根の南東側の斜面上に位置する。縄文中期末から後期初頭の上器片と奈良時代の壺形土器の破片が確認されている。

### 3 大沢遺跡

梯字大沢の標高520m前後の小扇状地上に所在する。釣廻ヶ岳に源を発する大沢が松原地区で芦川と合流する手前に位置し、ゆるやかな北斜面上に所在する。縄文時代の上器片と黒曜石の石鏃および平安時代の土師器片が確認されている。

### 4 井ノ向遺跡

梯字井ノ向に所在する。芦川左岸の小河岸段丘上にあり、水田となっている。黒曜石の石鏃が採集されている。

### 5 鮫田遺跡

古閑字鮫田の飯田沢の下方、標高570m付近に所在する。鮫田沢の右岸を中心とするゆるやかに南面する台地上である。平安時代中ごろ以降の土師器の杯・壺などの破片が確認されている。また中世以降の雑器や陶器片も採集されている。

### 6 上平遺跡

古閑字上平に所在する。標高590m、役場の西方約100mの台地上に位置する。縄文土器片、平安時代土器片の杯・壺の破片と中世以降の雑器片などが採集されている。

### 7 向原遺跡

古閑字向原に所在する。西流する芦川と北流する寺川の合流点南東に位置し、標高は570mである。縄文時代の黒曜石の石鏃、平安時代の土師器の杯・壺がみられる。中世以降の雑器・陶器片も採集されている。

### 8 栗原遺跡

古閑字栗原に所在する。標高約600m芦川左岸の台地上に位置する。遺物は中世以降の雑器である土師質土器片が見つかっている。

### 9 入野遺跡

古閑字入野に所在する。入野の集落とその北を西流する沢の間の、標高約600mの所に位置する。栗原遺跡とは、沢を一つ隔てて約200m西にあたる。縄文中期末から後期初頭の土器が数点見つかっている。平安時代の土師器片と、中世以降の上縄やかわらけなどの土師質土器片・陶器片も採集されている。

### 10 荷付場遺跡

古閑字荷付場、芦川右岸の標高600mの狭い南向きの台地上に位置する。縄文時代の黒曜石の破片のみ数点発見されている。

### 11 精進遺跡

精進と古閑を結ぶ女坂峠の頂上付近に土器が発見されたという。標高約1200mの高所である点注目されている。大正年間の発見であり、出土遺物の行方も不明であるが、縄文中期の土器と思われる。(吉川文俊『富士山及び其裾野に於ける有史以前の日本人遺跡』1926、柴山常憲『富士の研究四』1929)

### 12 居村遺跡

精進字居村地区に所在する。精進川が精進湖に注ぎこむ扇状地上に立地し、標高920mを測る。遺跡は1960年頃にこの地区的貯水池を掘った際、地下4mほどの所から土器や骨が出土したことから明らかとなった。1971年、山梨郷土研究会の折井忠義氏が『甲斐路』第20号に紹介している。出土土器は、土師器の壺形土器である。土師器の特徴から古墳時代後期の鬼高式土器と考えられる。

- 13 川崎遺跡  
精進北岸の標高900m付近に所在する。1960年の水害の際に土器が出土したとされるが、遺物の所在が不明のためここでは遺跡の存在を記述することにとどめる。
- 14 大久保遺跡  
鳥取子橋とバノラマ台をつなぐ山の尾根上の標高1240m付近に位置する。本栖湖東岸からバノラマ台へ向かう登山道工事中に、大正年間に発見されたという。遺物の所在は不明であるが、縄文中期土器片や石鎌・石斧の出土も報じられている。(吉田文後『富士山及び其樹野に於ける有史以前の日本人遺跡』1926、柴田常惠『富士の研究四』1929)
- 15 下畠遺跡  
本栖字下畠に所在する。渡辺氏屋敷跡と本栖の集落の間、標高920m付近に位置する。出土遺物として、古墳時代後期の須恵器の破片が一片あるほかは、すべて中世以降の遺物である。中世の土師質土器は、皿や土鍋と思われる破片である。陶器は、鉄釉の擂鉢・皿・壺がある。
- 16 中山遺跡  
本栖字中山に所在する。標高930mである。中世以降の雜器の破片がみつかっている。
- 17 高塚遺跡  
本栖字高塚に所在する。標高930m、江岸寺の北東に位置する。中世と思われる雜器の破片が採集されている。
- 18 潟水遺跡  
本栖字湖水の本栖湖東側湖畔に所在する。標高900m前後の県営駐車場の南に位置する。この遺跡は、摩芥物廃棄のために掘られた穴の断面及び廃土より発見された。掘削された断面を観察すると、地表より約40cmのところまで溶岩の礫があり、その下に約10cmの黒色火山灰がみられ、以下溶岩が堆積している。遺物は、この第2層目の黒色火山灰層からの出土である。発見された遺物は、すべて古墳時代前半の土師器片である。器形としては、小片ながら壺・高杯・壺が存在することが判明している。
- 19 上野原遺跡（第2図）  
本栖湖東岸の上野原地内に所在し、標高900mを測る。遺跡は微高地にはさまれた崖地にあり、付近は現在キャンプ場として利用されている。この遺跡は、摩芥物の廃棄のため掘削された坑の断面およびその残土より土師器片が検出されたことにより、確認された。掘削された坑の断面には、最上層の溶岩、その下に1.5m前後の黒色土、さらに下方に溶岩が堆積する。土師器片は、いずれも中層の黒色土中から発見された。平安時代の杯・皿・壺の土器片である。
- 20 西一条遺跡（第2図）  
遺跡は、富士山西麓の富士ヶ嶺西一条地内にあり、標高1200mを測る尾根部分に位置する。付近には北方100mほどに富士豊茂小学校が存在する。1961年村道富士ヶ嶺1号線に通じる道路の開設工事現場において掘削部断面より完形土器が発見された。土器は、古墳時代初頭の壺形土器である。
- 21 南二条遺跡（第2図）  
富士ヶ嶺南二条地内に所在し、標高960mの尾根の緩斜面に位置する。遺跡の南方には谷が東西に走る。1965年ころに畑の耕作中に土器片が出土したと伝えられる。
- 22 湖底遺跡（第4・5・6図）  
本栖湖東岸の湖畔から沖へ7m～62mで、水深10m前後の湖底に位置する。県営駐車場の南付近から本栖湖スポーツセンターにかけての範囲である。引き揚げられた遺物は、縄文時代中期の土器・石器が数点と、大部分が古墳時代初頭の土師器の壺・高杯である。なお関連するものとして湖水遺跡が考えられる。
- 23 龍ヶ岳経塚  
本栖湖の南岸に接する標高1485mの龍ヶ岳の中腹に所在する。小牒に経文を墨書きしたもの埋納した一石経の経塚である。
- 24 渡辺氏屋敷（第2図）

本柄の城山から南方へ約1km、本柄湖畔に近いやや小高い所に存在する。武田氏に仕え、駿河へと続く中道往還の警備の役目を負っていたとされる渡辺因獄佑の屋敷跡と伝えられる。出入口部の虎口は本柄湖に向かった南西端の石壘（溶岩の石積み）が内側に屈曲した場所と思われる。すぐ脇は煙硝屋敷といわれている。虎口から北方に屋敷跡が延びているが、北東隅には五輪塔群があり、渡辺因獄佑の墓といわれている。

## 25 木柄の城山（第2図）

鳥取子岳から青木ヶ原樹海に半島状にせり出した標高1056mの城山山頂に所在する。細長い尾根を利用して連郭状に郭を配置し、その前後に尾根切りによって防備している。主郭は尾根上で最も広い平坦部を使っており、東西約40m、南北約10mの規模である。主郭の南側は断崖となっているが、主郭への登り口付近の傾斜面には扁平な溶岩を用いて石積みを行い、土砂の崩壊を防ぐ工夫をしている。

## 26 樹海内石墨遺構（第2図）

本柄の城山と中道往還に関連するものと考えられているが、石墨は城山の南側郭に所在する。扁平な溶岩を積み重ねて石垣状の施設を造っている。石墨は4カ所が確認されているが、高さ0.9m～1.2m、幅0.6mの石積みと高さ約3m、底径約6mの石積みである。

## 27 土橋氏屋敷

古関宇木郷にあり、民家に囲まれた水田中が土橋大内蔵の屋敷といわれている。その一角に石の祠が祀られているが屋敷の形状は明らかでない。

### 3 村内遺跡の概要

村内遺跡の総数は27か所である。時代的な内訳は、縄文時代10か所（6か所が他の時代の遺跡と複合）である。縄文時代の遺跡の分布は、古関地区の芦川流域に集中している傾向がある。急峻な山が連なる地形から、居住に適した平坦部が少ないので、狭く限られた河岸段丘などが選地された結果であろう。女坂峠を越えた精進・本柄地区では、縄文時代の遺跡は2か所である。富士溶岩流の影響によって縄文時代、さらには旧石器時代の遺跡の確認が困難になっていることが考えられる。なお、発見されている縄文土器は、縄文中期から後期にかけての時期であることから、村域内での人々の生活の存在を約4500年前まで、確実にたどることができる。

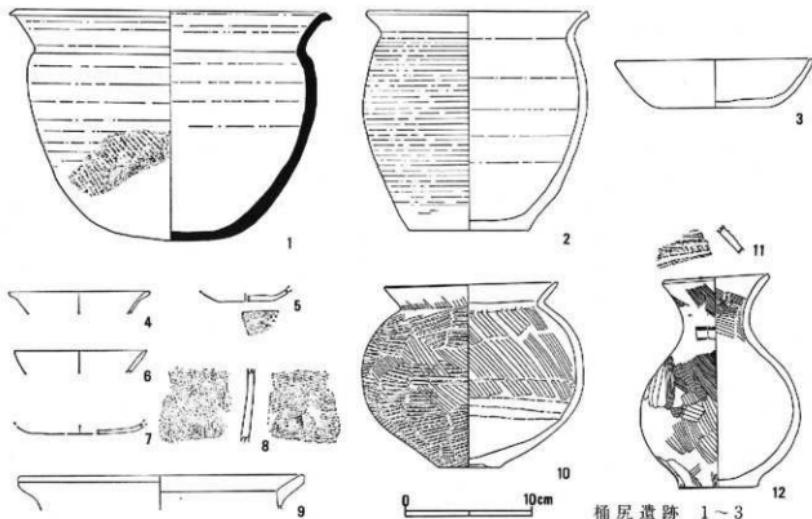
弥生時代の遺跡1か所である。宮上ヶ嶺の南二条遺跡では、弥生中期初頭の条痕文土器片、弥生後期後半の壺形土器が発見されている。壺形土器は、中道町の岩清水遺跡などの土器と類似し、弥生後期後半の土器である。甲府盆地への弥生文化の流入経路にあたる遺跡であろう。

古墳時代5か所（2か所が複合）である。精進湖に近い居村遺跡（古墳時代後期）、本柄湖の湖水遺跡、湖底遺跡（古墳時代前期）は、出土している土師器から集落の存在を推定することができる遺跡である。また、富士ヶ嶺の西一条遺跡の出土器は、古墳時代初頭の畿内型土器と考えられる。このような外来系土器の流入が、山梨の古墳文化形成とどのような関係があるのか今後の課題である。

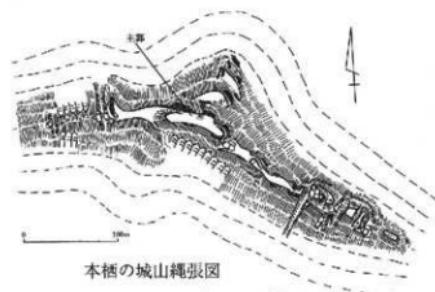
奈良・平安時代8か所（6か所が複合）である。本柄湖東岸の上野原遺跡の土師器は、上層に溶岩、その下に黒色土、さらに下方に溶岩が堆積するが、その黒色土（1.5m）の中から発見されている。9～10世紀代の皿・杯・壺などである。平安時代のある時期、富士山からの溶岩流によって集落が埋没したのである。溶岩流の編年研究と土器編年の研究から興味ある遺跡である。桶尻沢遺跡は、急傾斜地にあり、奈良時代（8世紀代）の須恵器の鉢、土師器の壺などが出土しているが、宗教的な場所であったと考えられる。

中世・近世12か所（4か所が複合）である。中世は戦国期の城館跡である。中近世の古関・本柄地区は、中道往還の要所であったことから、村域内でも拠点的集落が形成されたのである。土師質土器・陶器片などが確認される遺跡が多い。近世の民間信仰と思われる龍ヶ岳経塚（一石経の経塚）などの調査は、今後の課題である。

村内の遺跡の分布状況を特徴づけているのは、占道としての中道往還といえよう。弥生文化や古墳文化は、この道筋をたどり甲府盆地へと伝播したのである。奈良・平安時代にも甲斐国と駿河国を結ぶ道であり、また畿内の政治・経済・文化を運んできたのである。中世の戦国期は軍用道路や物資輸送路として重要な役割をはたした道であった。この南北を貫く道に沿うように、遺跡の多くが存在していることが知られた。



桶戸遺跡 1~3  
上野原遺跡 4~9  
西一条遺跡 10  
南二条遺跡 11·12



本栖の城山縄張図



本栖の城山周辺の樹海内石塁遺構位置図



渡辺氏屋敷 略図

#### 土器実測図は

『上九一色村誌』1985年より

#### 中世城跡図は

『定本山梨県の城』郷土出版 1991年より

『山梨県の中世城館跡』山梨県教育委員会 1986年より

第2図 村内遺跡関係土器実測図及び中世城館跡図

## 第5章 本栖湖の湖底遺跡の調査

### 1. 調査の経緯

1990年頃、本栖湖の東岸近くの湖底より土器が発見されることが伝えられていた。水中であるために潜水技術を必要とすることから、その事実については未確認であった。その後、専門技術を有する地元の高須建夫氏等による潜水探査により、水深10m前後で土器を確認することができた。

今回の水中における調査は、これまでに確認された湖底の状況を明確に把握することにつとめ、湖底遺跡の範囲や遺物探査による時代の確定や遺跡の性格を明らかにするとともに、遺跡の保護を計ることを目的として実施した。期間は1998年8月31日～9月11日である。

### 2. 湖底の遺物（第4・5・6図）

湖底より引き揚げられた遺物は、古墳時代の壺形土器を中心となっているが、一部縄文土器や石器もみられる。土器は長期間水の中にあったため、その多くは器面が洗われ、胎土中の小粒子が粗く浮きでている。そのために土器の製作に伴うヘラ状工具などによる調整痕は確認できない。結果として上器本体の器壁の厚さは失われている。以下、実測可能なものを取りあげ、その概要を述べる。なお、今回の調査以前に採集された遺物も参考に紹介する。

第4図1-1 壺形土器。器壁は厚く遺存状況は良好である。湖底の泥土に埋もれていた部分であろうか。外反する口縁部に最大径があり、20cmを測る。現高は14cmである。

第4図3-1 壺形土器。口縁部がゆるやかに立ちあがる。最大径は胴部にある器形で、口縁部径12cmである。器壁は薄い。

第4図5 壺形土器である。最大径は胴部。口縁部径13.8cm。

第4図6 土器全体の半分がある。器面にヘラ状工具による調整痕が認められる。外反する口縁部に最大径があり、15.8cmである。

第4図7-1 壺形土器の底部である。

第4図7-2 台付壺の脚部であり、現高7cmである。

第4図8 S字状口縁をもつ台付壺形上器である。口縁部径は17.5cmである。

第4図9-1 壺形土器である。胴部に最大径がある。口縁部径は12.8cm。現高7.5cmである。

第4図10 壺形土器である。口縁部が大きく外反する。口縁部径は15cmであり、現高は5.5cmである。

第4図11 台付壺の脚部であり、現高6.5cmである。

第4図12 壺形土器である。口縁部はゆるやかに立ちあがる。器向の一部に調整痕がみられる。口縁部径は14cmであり、現高は12.5cmである。

第4図13 壺形上器である。口縁部径は15cmであり、現高は6cmである。器面に調整痕がみられる。

第4図14 壺形土器である。土器全体の半分があり、遺存状況は良好である。口縁部径は15cmである。

第5図16 壺形土器の胴部である。

第5図17 壺形土器の肩部から胴部にかけての部分である。

第5図18-1 壺形土器である。外反する口縁部径は9.4cmである。現高は12cmである。

第5図19 壺形上器である。口縁部径は13.6cmであり、現高は6cmである。

第5図20 壺形土器である。頸部から高く立ちあがった口縁部をもつ。口縁部径は11.4cmである。

第5図21 壺形土器の底部である。

第5図22-1 台付壺の脚部である。現高は7cmである。

第5図22-2 壺形土器である。頸部から高く立ちあがった口縁部をもつ。口縁部径は11cmである。

第6図15-1～15-4 縄文時代中期の深鉢形土器の小片である。4は上器片を利用した鍤である。

第6図18-2 縄文時代の磨石である。

第5図① 壺形土器である。口縁部径は17.6cmである。現高は17.5cmである。

第5図② 壺形土器である。やや肥厚した口唇部をもつ口縁部であり、口縁部径は17.8cmである。

第5図③ 壺形土器である。頸部から高く立ちあがった口縁部をもつ。現高は8.5cmである。

第5図④ 台付壺の脚部である。現高は6cmである。

第5図⑤ 高杯の脚部である。脚部に孔がある。現高は8cmである。

第5図⑥ 縄文時代中期の深鉢形土器の口縁部である。

### 3. 湖底遺跡の調査成果（第3図）

本柄湖東岸の湖底で発見された土器の分布状況は、図に示したとおりである。その範囲は約600mにわたっているが、およそ3か所にやや集中してみられる傾向にある。今回の調査では広範囲であるが、湖底遺跡と呼んで1遺跡として扱っておきたい。なお遺跡は、古墳時代を主体としているが、No15、No18地点では縄文時代中期の土器・石器が確認されており、複合遺跡といえよう。

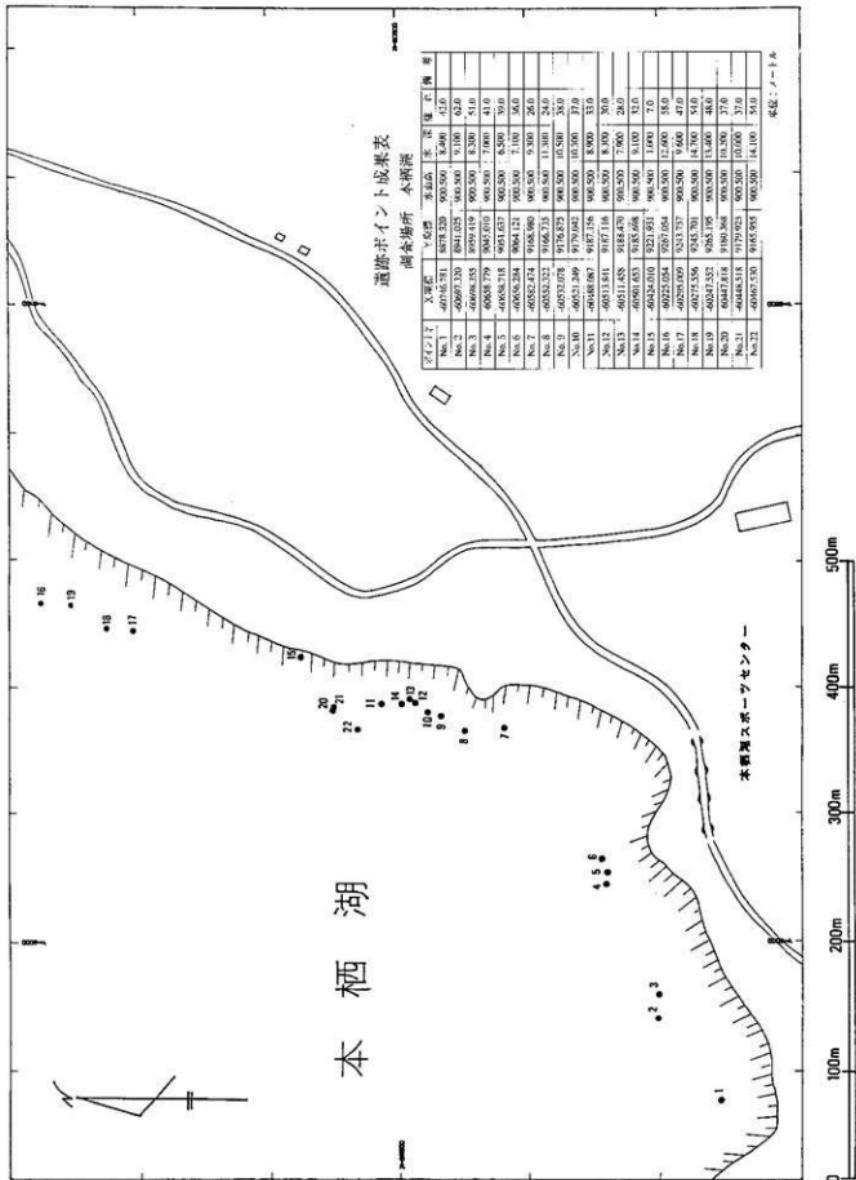
古墳時代が主体となっている湖底遺跡は、湖岸から沖へ7～62m、水深7～14.7mで確認されている。水中調査金という条件の中で、地形観察が十分できなかつたという制約はあるものの、湖岸からの距離、水深などから基本的で地盤としては、調査範囲となった湖底は平坦面を形成していることを確認することができた。また、土器の遺存状態が良好であることから、住居の存在も考えられるところである。水没した原因は、富士山溶岩流の湖への流入が水位を上げたことが主たる原因であろう。土器の様相から1～5世紀代の遺跡と思われる湖底遺跡は、5世紀代のある時期に水没したことになる。

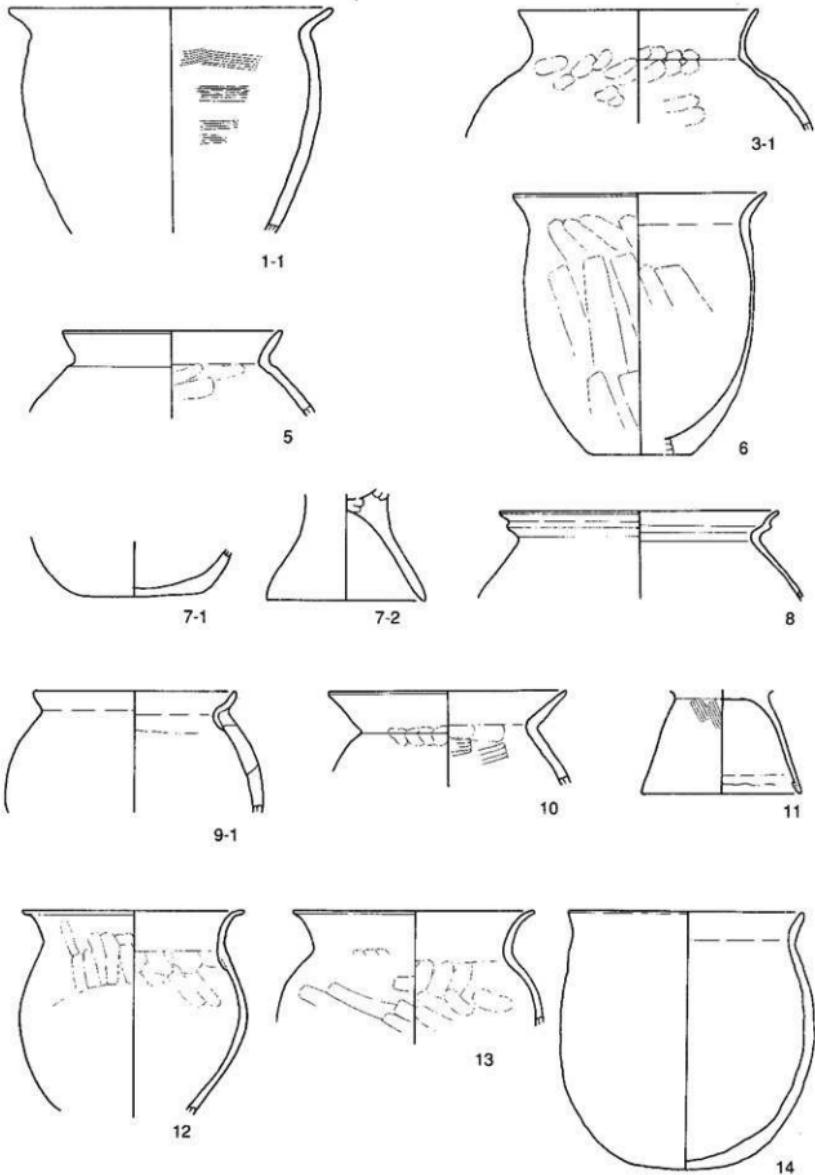
富士山の火山活動については、奈良時代の万葉集などからもうかがうことができるが、平安時代になると噴火による災害などについての記録が多くみられるようになる。『三代実録』の貞觀6年（864）には、溶岩流が本柄湖を埋めたことが具体的に記されている。本柄の上野原遺跡は、平安時代の集落の存在を知ることができる遺跡であり、しかも溶岩流に埋没した状態であった。このことは貞觀の大噴火との関係も推測されるところである。

今回の調査は、記録のある平安時代以前における本柄湖周辺の時代的な集落の推移を知る基礎的な調査の端緒となったといえよう。

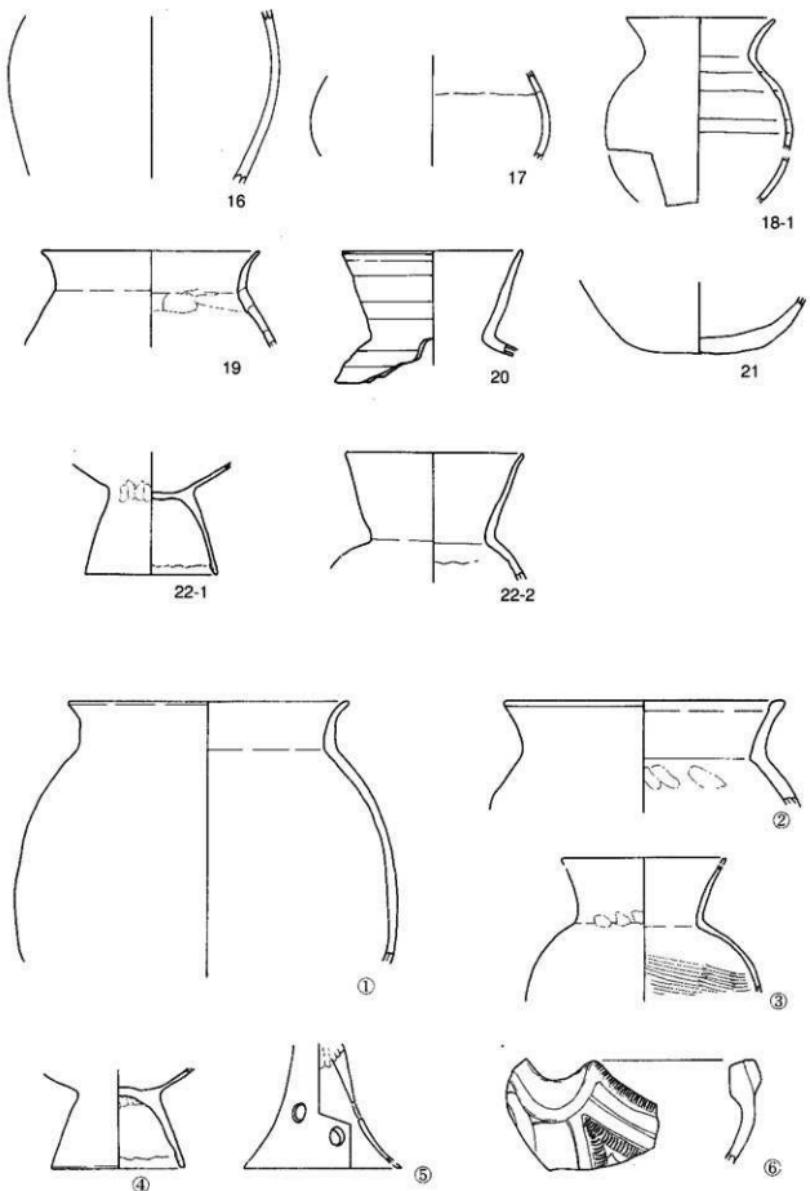
#### 引用参考文献

1. 『上九一色村誌』上九一色村 1991
2. 『山梨県遺跡地名表』山梨県教育委員会 1979
3. 『全国遺跡地図 山梨県』文化庁 1981
4. 『角川日本地名大辞典』角川書店 1984
5. 『山梨県の中世城館跡』郷土出版社 1991

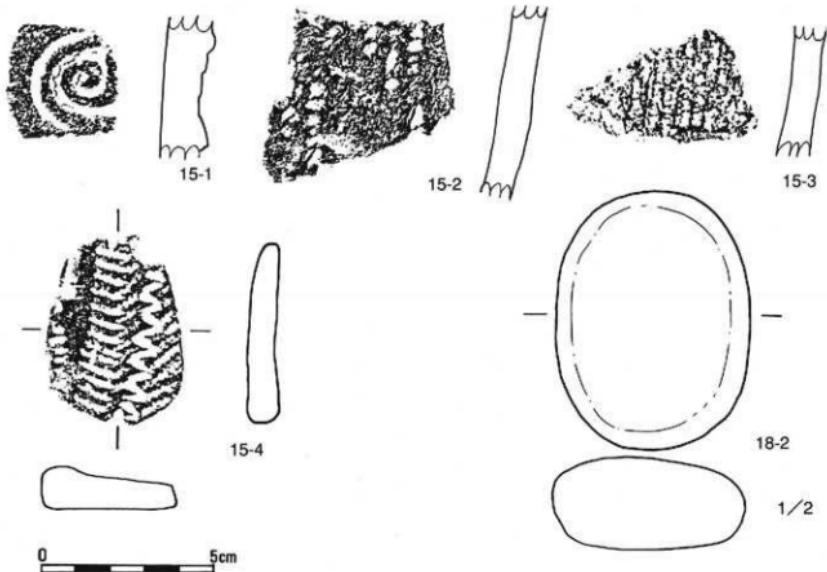




第4図 湖底遺跡 土器実測図



第5図 湖底遺跡 土器実測図



第6図 湖底遺跡土器拓影・石器実測図

# 図 版



1. 湖底遺跡遠景



5. 水中調査風景(1)



2. 水中調査準備(1)



6. 水中調査風景(2)



3. 水中調査準備(2)



7. 水中調査風景(3)

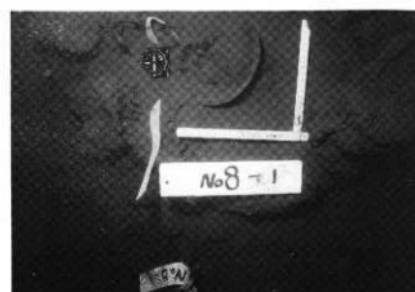
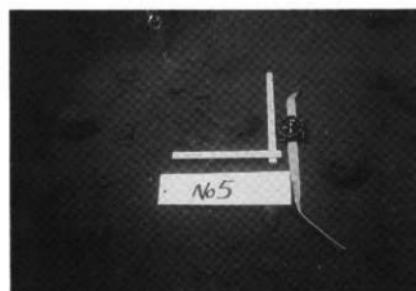
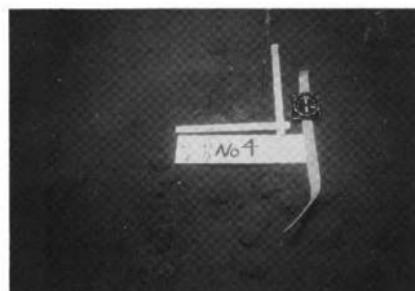
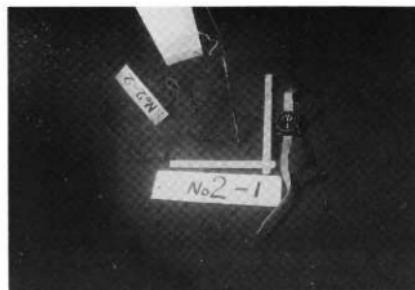


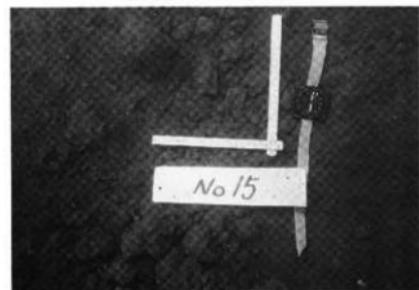
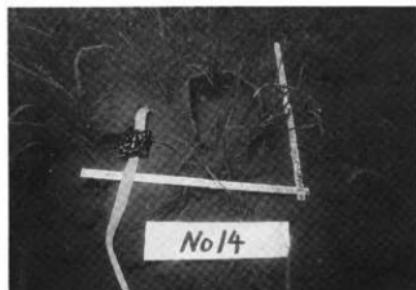
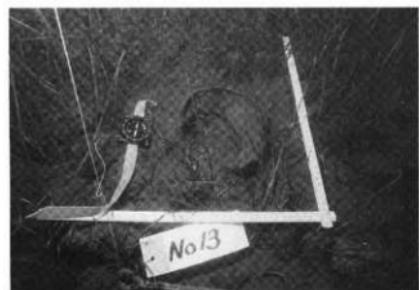
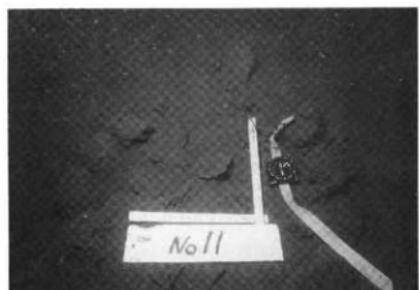
4. 水中調査準備(3)

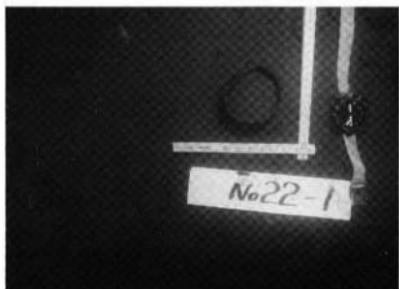


8. 湖底に横たわる土器

圖版 2  
湖底遺物確認狀況  
(1)









1-1



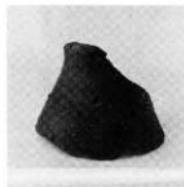
3-1



5



6



7-2



8



9-1



10



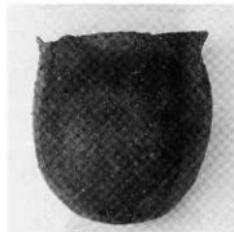
11



12



13



14



16



17



18



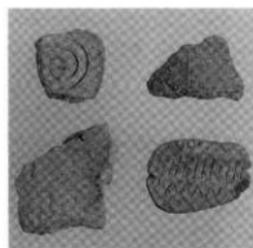
19



20



22-1



15



18-2



①



②



③



④



⑤



⑥

山梨県西八代郡上九一色村  
遺跡詳細分布調査報告書

1999年3月20日 印刷  
1999年3月25日 発行

発行 上九一色村教育委員会  
〒409-3712 山梨県西八代郡上九一色村古関1158  
TEL 0555 (88) 2111

6

0.

1

1

;

;

;

;